

記憶に残る話

校長 館岡 靖哲

「暑さ寒さも彼岸まで」と言われますが、朝夕は徐々に涼しくなり、秋の気配を感じる季節となりました。早いもので今年度も折り返し点を迎え、9月24日（木）の陸上競技を皮切りに新人体育大会も始まります。2学年中心の新チームとなって、初めての公式戦です。日頃の練習の成果を活かし、悔いの残らない試合を行ってくれることを期待します。また、10月23日（金）にはソニックシティにおいて創立80周年記念の合唱コンクールを予定しています。生徒が力を合わせ、どのような合唱コンクールを創り上げてくれるのか、今から楽しみです。

ところで、私は書籍や新聞、情報誌に目を通す時間を大切にしています。不思議なもので、意識はしていなくても、時を経ても記憶に残っている話があります。今回は、本校生徒の現状を踏まえて、二つの話を紹介させていただきます。

一つ目は、「フェライトの父」と呼ばれ、我が国のエレクトロニクス産業の基礎を築き、旧与野市の名誉市民第1号でもある武井武（たけいたけし）博士の話です。

『失敗のすすめ』 引用文献 「フェライトの父 武井武博士」 与野市教育委員会 非売品

仕事の結果は、成功・失敗・誤算・無意味・無駄・有害に大別される。そして、成功は◎、失敗は○、誤算は×で、無意味・無駄・有害は論外である。失敗は周到な態勢で懸命に努力したが、強敵の出現・環境の変化・不測の事態などの理由で目的を達し得なかったのだから、貴重な何かを残しているのだから○である。失敗は「進歩につながる貴重なもの」ととらえたい。恐れるな。

失敗を恐れて挑戦しない生徒、行動をためらう生徒が見受けられます。失敗を×としないで○とする発想は、日頃の学校生活の中でも通用するものだと感じます。

二つ目は、技術・家庭科の授業を参観した時、教員が鋸（のこぎり）の説明をしていた場面を見て思い出した話です。出典は新聞の投書で、私の古いメモ帳に残っていたものです。

『鋸の目立て（のこぎりのめだて）』 ※目立て→鋸の刃をやすりにより研磨すること。

この道40年というベテラン大工さんの鋸を見せてもらった。大工さんの話では「この鋸は刃が欠けるたびに目立てをして、40年も使ってきたんだ。言わば私の人生そのものがこの鋸なんだ」とのこと。私が感動したのは、一振りの鋸を40年も目立てをしながら使ってきた大工さんの器量にである。物の豊かな時代に生まれた子どもたちが、物を粗末に扱うことが取り沙汰されている。この大工さんの物を大切にする心を、これからの子どもたちに伝えていきたいものだ。

教職員間でよく話題になるのは、本校は生徒の落し物や忘れ物が多いこと。そして持ち主が現れないことです。その代表例が「ビニール傘」です。先日、NHKでビニール傘の処分についての特集がくまれていました。ビニール傘はプラスチックや金属、接着剤など多様な素材が使用されていて、ペットボトルのような単一素材に比べリサイクルが困難なことに加えて、これまで海外へ処分を頼っていたプラスチックごみについて、海外の国が受け入れを拒否するようになり、廃棄さえ困難になっているそうです。出典：便利な“ビニール傘”その現状 NHK ニュース おはよう日本

SDGsや地球温暖化防止が叫ばれる今、学校と家庭、地域が連携し、物を大切にする心の育成が、急務であると感じています。